

『源氏流極秘奥儀抄』 注釈 (六) 39夕霧〜46椎本

岩 坪 健

本稿は『源氏流極秘奥儀抄』の夕霧（『源氏物語』第三九帖）から椎本（第四六帖）までを掲載する。各帖の担当者（芦野陽子、小林芙美、浦野洋紀、高山卓）は、すべて本学博士課程在学者である。凡例などは前稿と同じであるので省略する。

三十九 夕霧

「山かつのまかきをこめてたつきりも心そなる人はと、めす」とは、落葉の宮の御歌なり。母宮もの、けにて小野にかへり給ふに、夕霧の大將たつね参らせられ、一夜留り給ひたる事あり。落葉の宮の下心ありて、よみ給ひし歌也。ゆふ霧の巻とは、これより名つけたるなりけり。

山里のあはれをそふる夕霧にたち出ぬ方もなき心地して

夕霧

御伝曰、此形、大葉を横につかひ其下に糸す、き遣ふ也。芒無時は、つかはずともよし。冬かれのかやにてすへし。花は時節の花、活へし。大葉、糸芒霧の心にとる也。ころは秋と心得へし。

愚<sup>11</sup>按<sup>12</sup>曰、霧<sup>キリ</sup>を佛<sup>オモカケ</sup>に移<sup>ウツ</sup>すは槓<sup>マキ</sup>第一也。へ村雨の露もまたひぬ槓の葉に霧立のほる秋の夕くれ 此歌、夕霧<sup>ユウキリ</sup>に当<sup>アッ</sup>れり。秘伝<sup>ヒデン</sup>なり。又、枯柳<sup>カレヤナキ</sup>に時分の花<sup>シブン</sup>を活<sup>イク</sup>る。「瀧の音」といふ詞 黄葉<sup>14</sup>。「落葉」といふ詞。外 秋草<sup>15</sup>、数々活るもよし。「秋深き野山」といふ詞。木<sup>キ</sup>にても紅葉の如し。

三十九 夕霧 夕ざりの大将。大葉、糸芒、槓、時節ノ花。

【訳】「卑しい私の家の垣根に立ちこめる霧も、上の空な人を留めることはしません」とは、落葉の宮の歌である。（落葉の宮の）母宮が物の怪に悪い、小野へお帰りなさるところに、夕霧の大将が参上なさり、一晩お泊まりなさったことがある。落葉の宮に下心があり、お詠みになった歌である。夕霧の巻とは、この歌から名づけたものであった。

山里のしみじみとした趣に寄り添う夕霧に、出て行く方向もない気持ちがして。

師伝によると、この形式は大葉を横に使い、その下に糸薄を使うのである。薄が無い時は、使わなくてもよい。冬枯れの萱で代用するのがよい。花は季節の花を活けるのがよい。大葉と糸薄は霧の風情と解釈するのである。季節は秋と心得なさい。

愚案によると、霧を連想するのは槓が第一である。「にわか雨の露もまだ乾かない槓の葉に、霧が立ち上る秋の夕暮れよ」。この歌は、夕霧に相当する。秘伝である。また、枯れた柳に時節の花を活ける。柳を瀧に見立てる。「瀧の音」という言葉。黄葉。「落葉」という言葉。他の木でも紅葉のようである。秋草をたくさん活けるのもよい。「秋の深まった野山」という言葉。

【注】 1 「山かつのまがきをこめてたつきりもこゝろそら成人はとゝめす」とは、おち葉の宮の御歌にて候（『龍野』）。夕霧の和歌（注6の歌）に対して落葉の宮が返した歌。「山がつ」（木こりという意味）は小野の山荘に移り住

んだ落葉の宮の謙称で、「心そらなる人」(誠意のない人)である夕霧を落葉の宮は拒絶している。2 「母宮、もの、けにて小野へうつり給ふに」(『龍野』)。「母宮す所、一条の宮にて和こんひきし人、もの、けにわつらひ給ひて、いたく山さとに、かやうのおりの用にや、こしらへ給へる所へ、うつろはせ給ふ」(『小鏡』)。「母宮」は一条御息所で、朱雀院の更衣であった。小野へ移った理由として物語本文には、「早うより御祈禱の師にて、物の怪など払ひ棄てける律師、山籠りして里に出でじと誓ひたるを、麓近くて、請じおろしたまふゆゑ」(三九六頁)とある。3 「夕霧の大将、たつねまいらせられ、一夜とまり給ひたる事、有まいらせ候」(『龍野』)。「大将(中略)、宮の御かたのみすのまへのすのこにおはして、(中略)其夜はとまり給ふ」(『小鏡』)。4 「おちのはの宮の下心ありて、よみたまひし歌にて候」(『龍野』)。「大将の小野のかよいちち、此一条のおちのはの宮に、ふかく心をかけ給ふ程に」(『小鏡』)。5 「夕霧とは此事にておはしまし候」(『龍野』)。6 夕霧が詠んだ卷名歌。四句めに異同があり、『小鏡』は「たち出んそらも」、『龍野』は「立出ぬか、にも」。7 「此かた、大葉を横へ遣ひ、その下へ糸す、きつかふ」(『龍野』)。「いけばな総合大事典」によると、大葉は「立華の道具の一つで、正真の下から胴作にかけてもちいられた大きな葉」で、「通常は三枚または五枚という奇数で(中略)もちいる」。また、「花材は枇杷の葉が一般的だが、柏、朴などの葉もちいられる」。薄は「夏から秋にかけていけばなで欠かすことのできないあしらいの花材」で、「美しくなびく葉の姿がこのまれ」る。糸薄は「葉幅が狭い」(『いけばな花材総事典』、一九七九年九月、講談社)。

8 「す、きなき時は、冬かれのかやにてすへし」(『龍野』)。「日本国語大辞典」によると、萱は「屋根を葺くのに用いるイネ科、カヤツリグサ科の大形草本の総称」で、「主としてススキ、チガヤ、スゲなどが用いられる」。9 「花は、時節の花、生べし」(『龍野』)。10 「大葉、す、き、霧の心にとるなり」(『龍野』)。大葉の葉の大きさで霧の広

がり、糸薄の狭い葉幅で霧の濃さに見立てる。

11 楨は『いけばな花材総事典』によると、「出生の美しさは細長い線状の葉をそなえていることであ」り、「老木で自然の風情ある枝振りのものを用いることが好ましい」。

12 『百人一首』八七、寂蓮法師。この歌により楨を霧になぞらえる。

13 柳は「伝統的な花材のなかで古くからつかわれ」（『いけばな総合大事典』）ている。「たきのをと」（『小鏡』寄合語）。「柳、糸桜（注の音といふ詞に）」（5若紫の巻、注

19）。「14黄葉は、「かえで」と「もみじ」の名称はどちらも同じも指して使用されている」（『いけばな花材総事典』）。「いけばな総合大事典」でも、「モミジ」とよばれる園芸品種の大部分は本種（稿者注…イロハカエデ）の変

異品」とする。また同書では、イロハカエデが「ことに色彩が美しい」と記す。「おちは」（『小鏡』寄合語）。15

「秋ふかき野山」（『小鏡』寄合語）。「秋ふかき小野の山のけしき」（『小鏡』）。秋草を数多く活かすことで、秋の盛り（イマ）の小野を演出している。

（芹野陽子）

#### 四十 御法

源氏五十二歳の頃、紫の上なやみ大事にて、御いのりの僧数多、千部の法華経くやういかめしく、大法会ありて、いと貴し。法華経の法会は、三月十四日也。その法会はて、おのく帰り給ひなんとするに、花ちる里の御方に、

4 たへぬへき法なからぞ頼まる、よ、にとむすふ中の契を

花ちる里、

5 結をくちきりはたへし大かたの残すくなきみのり成とも

御法

御伝<sup>6</sup>ニ曰、若松<sup>ワカマツ</sup>に老母草<sup>コキク</sup>、小菊<sup>トメ</sup>、留<sup>マツ</sup>。又、幹<sup>ミキ</sup>、竹<sup>タケ</sup>にても仕立<sup>シタツ</sup>る也。弥生<sup>ヤヨヒ</sup>十四日<sup>コト</sup>の事<sup>シユ</sup>と知<sup>ル</sup>へし。是<sup>8</sup>は紫<sup>ムラサキ</sup>の上<sup>ウヘ</sup>なやみ大<sup>ダイ</sup>事<sup>シ</sup>にて、千部<sup>センブ</sup>の法華<sup>ホケノヤウ</sup>経<sup>キョウ</sup>いかめしく大法会<sup>ダイホウエ</sup>ありと心得<sup>ココロウチ</sup>へし。

愚按<sup>9</sup>ニ曰、是<sup>9</sup>は蓮<sup>レン</sup>を活<sup>イク</sup>る事<sup>コト</sup>、第一<sup>10</sup>也。又、早咲<sup>ハヤサキ</sup>のかきつばだ<sup>(マ)</sup>もよし。うつむきたるさま、よし。紫<sup>ムラサキ</sup>の上<sup>ウヘ</sup>、御<sup>ミ</sup>なやみ<sup>ヤミ</sup>の姿<sup>カタ</sup>にとる也。但し祝義<sup>12</sup>に用<sup>モテ</sup>ふへからず。又、紅梅<sup>13</sup>、桜<sup>サクラ</sup>を形身<sup>カタミ</sup>になし給<sup>タマ</sup>ふことあり。二種<sup>14</sup>活<sup>イキ</sup>るも習<sup>ナラヒ</sup>あり。

四十 御法(読経) 玉かづら。若松、万年青、小菊、蓮、杜若、竹、紅梅、桜。

【訳】光源氏が五十二歳の頃、紫の上の病気が重いので、ご祈祷の僧が大勢で、千部の法華経供養を盛大に行なう大法会があつて、たいそうすばらしい。法華経の法会は、三月十四日である。その法会が終わつて、それぞれお帰りになろうとする時に、(紫の上が) 花散里の御方に、

もうすぐ息絶えてしまう我が身が催す法会も、途絶えてしまふに違ひないでしょうが、頼みに思われます。三世にわたつて結ばれているあなたとのご縁を。

花散里は、

(この法会で) 結んだ縁は絶えないでしょう。誰にとつても残り少ない身で催す法会が、あと残り少なくなつても(ありがたいものである)。

師伝によると、若松(を中心)に、老母草と小菊を花留めにする。また、中心は(若松が無ければ) 竹でも仕立てるのである。三月十四日の事と理解しなさい。これは、紫の上の病気が重くなつたので、千部の法華経供養を盛大に行なう大法会があると理解しなさい。

愚案によると、これは蓮を活けるのが第一である。また、早咲きの杜若もよい。うつむいている状態がよい。紫の

上がご病気の姿になぞらえているのである。ただし祝儀に用いるべきではない。また、紅梅、桜を形見になさることがある。二種類を活けることも決まりがある。

【注】 1 「此巻、みのりと云事。むらさきの上、なやみ大事にて、年ころ千部のほけきやうのくやう、いかめしき大ほうゑあり。（中略）いとたつとし」（『小鏡』）。「源氏、五十二才の頃、紫の上、御心れいならす、御いのりとして、数多の僧、千部の法華経をとくしゆしたる事ありまいらせ候により」（『龍野』）。旧年立、新年立ともに光源氏の年齢を五十一才とする（池田亀鑑編『源氏物語事典 下巻』一九六〇年六月、東京堂出版）が、『龍野』は次の幻の巻も五十二歳。 2 「ほけきやうのほうゑは、やよひ十四日也」（『小鏡』）。 3 「御ほうじはて、をのく、帰り給ひなんとするに、花ちるさとの御かたへ」（『小鏡』）。 4 卷名歌。『小鏡』は同文。『龍野』は二句めが「みのりなからも」。「御法」の「御」に「身」を掛け、御法も身も「たへぬ」（絶えてしまう）と詠む。 5 『小鏡』所収の和歌本文も同じ。「大かたの」（世間一般の）法会に対して、紫の上主催のものは格別であったと讃える花散里の返歌。掛詞は注4と同じ。 6 「此かた、若まつに老母草、小さく留メ、身木、竹にてモ仕立る也」（『龍野』）。老母草は「植物『万年青（おもと）』の異名」（『日本国語大辞典』）で、赤い実がなる。『いけばな総合大事典』によると、万年青の葉組み（葉物で葉を組み合わせて形を作る）の特徴は実の挿し方で、新葉と古葉の間に挿して使うことが定められている。「留」は生け花を活ける際、花がながれないようにするための技法（『いけばな総合大事典』）。 7 注2を参照。 8 注1を参照。 9 蓮は『いけばな花材総事典』によると、「蓮は特に深い仏縁があるために、過去、現在、未来の三世の表現がなされる」もの。次の幻の巻、参照。 10 かきつばたは、五、六月ごろ濃紫色の花を二、三個咲かせるアヤメ科の多年草（『日本国語大辞典』）。ここでは紫の上になぞらえたもの。 32 梅枝の巻、注11参照。 11 花

が垂れている様子は、病に臥せっている紫の上に見立てる。なお紫の上が初登場する5若紫の巻でも、泣きべそをかいている様子を、うつむいている花で表現している。12「祝義」は「祝いの儀式」(『日本国語大辞典』)。紫の上の病気が重くなり、法会を催す場面であるので、祝い事には用いない。13「我はかなく成たらん時は、此たいにすみ給ひて、此紅梅と桜とは、かたみに取をき見給へ」との給へば(『小鏡』)。紫の上が匂宮に二条院を譲り、遺言する場面。『源氏物語』には、「大人になりたまひなば、ここに住みたまひて、この対の前なる紅梅と桜とは、花のをりをりに心とどめてもて遊びたまへ。さるべからむをりは、仏にも奉りたまへ」と聞こえたまへば(五〇三頁)とある。14二種活けは、種類の異なる花材を二種類用いていける活け方をいう(『いけばな総合大事典』)。

(小林芙美)

#### 四十一 幻

世の中は老少不定のならひなれば、紫の上、遠く此世をさり給ひければ、光る君の御歎、大かたならず。夢にみつ、うつ、となく、思ひやみ給ふ物語也。幻の世といふ心にて、終に御物おもひ積りて源氏君、五十二歳をかぎりとして雲かくれ給ふ。御いたはしき事を、かきつらねたる巻なり。

大空をかよふ幻夢にだに見へこぬ玉の行衛たつねよ

#### 幻

御伝曰、此形、無常の花也。蓮か芥子か、兎角もろき花を生る也。其外、生る逆も物さひしく生る也。故に常に活るに、軽く浅はかなる花も悦人あれども、軽きも心得違有て、多くは無常の花に成易しと心得へし。

愚按曰、かたみの紅梅に鶯の鳴ける事あり。紅梅を活るは此習也。桜よし。藤、山吹もよし。皆詞によれり。又、

竹タケをイク活ホトる。郭公ホトキスにかたどウツる。卯花ウツハナもよし。皆卷ミナマキの景物ケイブツ也。

四十一 幻12（吊13）ひけくろの大將。蓮14、芥子、紅梅、桜、藤、山吹、竹。過去15、現在、未來ノ活方。

【訳】世の中は、老少不定が習いであるから、紫の上がこの世を去ってしまわれると、光源氏のお嘆きは、並一通りではない。夢を見ているようで、正気ではない様子で、（光源氏が）思い悩まれる物語である。幻のようにはかないこの世という趣で、とうとう物思いが積もって、光源氏が五十二歳を最後にお亡くなりになる。おいたわしい事を書き連ねた巻である。

大空を行き交う幻術師よ、夢の中でさえ姿が見えない（紫の上の）魂の行方を探し求めてくれ。

師伝によると、この形は無常の花である。蓮か芥子か、とにかく、はかない花を活けるのである。そのほかを活けるとしても、物さびしく活けるのである。故に、普段活ける際に、軽く奥深くない花も喜ぶ人がいるけれども、軽いついことにも思い違いがあつて、多くは無常の花になりやすいと心得なさい。

愚案によると、形見の紅梅に、鶯が鳴いていた事が（当巻に）ある。紅梅を活けるのは、これに習ったものである。桜がよい。藤、山吹もよい。すべて（当巻の）言葉によっている。また、竹を活ける。（竹は）ほととぎすになぞらえる。卯の花もよい。これらはすべて（幻の）巻の景物である。

【注】 1 「世の中は老少不定のならひ、紫の上、浮世を遠くさり給ひ候へは、光る君の御なげき、大かたならず」（『龍野』）。老少不定とは、「仏語。人間の寿命はわからないもので、老人が早く死に、若者が遅く死ぬとは限らないということ」（『日本国語大辞典』）。ここでは光源氏が年下の紫の上に先立たれたことを指す。二人の年齢については注3を参照。 2 「ゆめにみつ、うつ、となく、おもひやみ給ふ物語に候へは、まほろしの巻と申にて候」（『龍



野』)。3「終には、御ものおもひつもりて、五十二才をかきり、くもかくれ給ふ。御いたわしき事のみを書たる段にておはしまし候」(『龍野』)。「龍野」は前卷(40御法の卷)も「源氏、五十二才の頃」で、年齢は変わっていない。一方『小鏡』は5若紫の巻に、「けんし五十三、むらさきのうへ四十五にて、かくれ給ふ」とあり、『龍野』とは没年齢が一歳違う。なお『源氏物語』幻の巻に光源氏死亡の記述はなく、物語ではいつ亡くなったか書かれていない。ちなみに卷名のみ伝わる雲隱の巻がある。「二十六、雲隱」此巻、よにふらさす、大かた同前のこと葉なり。光源氏と申せは、雲かくれのよきたよりなり」(『小鏡』)。4卷名歌。『小鏡』も『龍野』も同文。光源氏が亡き紫の上を想つて詠んだ歌で、父桐壺帝が亡き桐壺の更衣を偲んだ歌「たづねゆくまほろしもがなつてにても魂のありかをそこと知るべく」(三五頁)と共通する言葉があり首尾呼応している。5「此かた、無常の花也。蓮か、けしか、兎角もろき花を生る也」(『龍野』)。6「其外、生るとても、物さひしく生るなり」(『龍野』)。7「故に、常に生るに、軽くあさはかなる花を悦ふ人、有之共、軽さも心得ちがへありて、多くは無常花に成り易ものなり」(『龍野』)。8「(紫の上が)かくれ給ひて又のとしの春のひかりを見給ふにも、春に心をしめ給ひし事を、おほしめし出て、あはれなるに、三の宮の、かのかたみの紅梅に、うくひすの鳴けるも、「しらすかほにて」と、なかめ給ふ」(『小鏡』)。「(句宮が)「母ののたまひしかば」とて、対の御前の紅梅とりわきて後見ありきたまふを、(光源氏は)いとあはれと見たてまつりたまふ。(中略)かの御形見の紅梅に鶯のはなやかに鳴き出でたれば、(光源氏は)立ち出でて御覧す」(五二八頁)。9「大かたの春に、ほのめかされてにや、梅の花さきみたれて、ちるさくらあはれは、さくさくらありと、山見わたされて、いか、あはれの浅からん。藤山ふきなどの、心ちよけに咲みたれたるも、うちつけに、露けくのみなれ給ふ(中略)まほろしの春は、かたみの紅梅、桜など云事あるへし」(『小鏡』)。「春深くなりゆくままに

(中略) 山吹などの心地よげに咲き乱れたるも、うちつけに露けくのみ見なされたまふ。(中略) 八重咲く花桜盛り過ぎて、樺桜は開け、藤はおくれて色づきなどこそはすめるを」(五二九頁)。「対の前の山吹こそなほ世に見えぬ花のさまなれ」(五三二頁)。 10 ほととぎすは紫の上をしのんで光源氏が詠んだ歌「なき人をしのぶる宵のむら雨に濡れてや来つる山ほととぎす」(五四一頁)、また同様に夕霧が詠んだ歌「ほととぎす君につてなんふるさとの花橘は今ぞさかりと」(五四二頁)にも見られる。ほととぎすは「橘の花を散らす、橘を宿とするとも詠まれ」(『歌ことば歌枕大辞典』)とされる。一方で、鶯との取り合わせで竹と詠まれる場合もある。これは竹林の中にある鶯の巢に、ほととぎすが卵を産み付けるからである。「うぐひすのねぐらの竹をしめおきて親のあとふむほととぎすかな」(夫木和歌抄・卷八・夏二・竹内郭公・二七三一・大納言経信卿)。「鶯のふるすの竹の時鳥夜をかぞへてや五月まつらむ」(洞院撰政家百首・上・夏・三〇六・関白)。 11 「夏の景物としての卵の花とほととぎすの取り合わせは『万葉集』ですでに用例が多数見える」(『歌ことば歌枕大辞典』)。 12 「吊」は釣り生けで、「置き生け(置き花)、掛け生け(掛け花)」とともに、飾りの三形式の一つをなすいけばな、ならびにいけ方の総称。古く室町時代に釣り香炉や唐物の釣り小物入れなどに想をえて発案された飾り方で、香炉形、皿形、深鉢形など、さまざまな形の「つり花瓶」がもちいられた」(『いけばな総合大事典』)。「龍野」の図では深鉢形と推測される。 13 「ひげくろの大將」(『龍野』)。幻の巻には登場しない。 14 「ハスは水中に生ずるものだから、他の草木とは立て混ぜることのできないものとされ、立華では一色物としてさだめられ、水物花材を取り合わせた草の一色物もあったが、いずれも他の草木と取り合わせることは禁じられていた」(『いけばな総合大事典』)とあり、『龍野』の図でも蓮しか活けていない。巻の景物を取り合わせた活け方は、蓮を用いない場合であろう。 15 「室町時代のたて花の世界では(中略)過去は散りはてた蓮の

花、蓮の実に破れ葉を添え、現在のさまは花の盛りに破れない葉を、未来の心として花いまだひらかざるつぼみに巻き葉を立て添えるものとして三世の伝としていた。この伝は後世になっても三世の伝として継承され一瓶の上中下に過去、現在、未来をあらわしている伝もある」(『いけばな総合大事典』)。幻の巻では、光源氏が過去を振り返る様子や幼い句宮の様子が印象的であり、それらを踏まえたものか。「(明石の君の)こなたにては、(光源氏は)のどやかに昔物語などしたまふ」(五三三頁)。「(光源氏は)いにしへあやしかりし日蔭のをり、さすがに思し出でらるべし」(五四五頁)。「年暮れぬと思すも心細きに、若宮の、「雛やはんに、音高かるべきこと、何わざをせさせん」と走り歩きたまふも、をかしき御ありさまを見ざらんこととよろづに忍びがたし」(五五〇頁)。また幻の巻全体が、光源氏の出家に至る一年間を描いたものであり、仏教色の強い巻であることも思い合わされる。

(浦野洋紀)

#### 四十二 句宮

句宮といへるは、かをる大将の事也。又、にはほ兵部卿ともいふ。三の宮と申て、紫の上やしなひたてまつりて、梅さくらゆづり給しかは、句の縁あり。うへは源氏の御子と申ながら、誠は柏木衛門と女三の宮との中の御子也、といふことをしるされたる巻也。十四歳にて御元服あらせ給ひしことより書そめたる也けり。

おほつかな誰にとはましいかにしてはしめもはてもしらぬ我身ぞ

#### 句宮

御伝曰、此形、幹松二本二株也。あしらひ、時節の花、床の左の方の松株ばかりにてあしらひすべし。此花は真也。元服の祝義第一なれば、盛の花は用捨すべし。半開よしと心得へし。

愚按<sup>クワン</sup>曰<sup>ニイワク</sup>、梅<sup>ウメ</sup>、桜<sup>サクラ</sup>、讓<sup>ユヅリ</sup>の花<sup>ハナ</sup>といふ。又<sup>ヨ</sup>、三<sup>ミヤ</sup>の宮<sup>ミヤ</sup>うらやみ給<sup>ミヤ</sup>ひて、春<sup>ハル</sup>は真<sup>マ</sup>かきの梅<sup>ウメ</sup>をかさし御身<sup>ワシ</sup>にふれ、夏<sup>ナツ</sup>は花<sup>ハナ</sup>橘<sup>チハナ</sup>をあつめ香<sup>カ</sup>をなつかしみ、秋<sup>アキ</sup>はかれゆく藤<sup>フチ</sup>袴<sup>ハカマ</sup>、紅<sup>ベニ</sup>菊<sup>キク</sup>までもにほひをあつめ給<sup>ミヤ</sup>へば、人<sup>ヒト</sup>々にほふ兵<sup>ヒヤウ</sup>部<sup>ブ</sup>卿<sup>キヤウ</sup>とぞ申<sup>マシ</sup>ける。皆<sup>みな</sup>香<sup>カ</sup>物<sup>モノ</sup>を活<sup>イカ</sup>る習<sup>ナラヒ</sup>とす。

四十二 句宮 句兵部卿。松、時節ノ花、梅、桜、花橘、藤袴、紅菊。

【訳】句宮といっているのは、薫大将のことである。また、句兵部卿ともいう。第三皇子と申し上げて、紫の上が養育してさしあげ、梅や桜を譲りなされたので、匂いに縁がある。世間では光源氏のご子息と申し上げながら、本当は柏木衛門と女三の宮との間のご子息である、ということを書き記された巻である。十四歳で御元服なされたことから書き始めているのであった。

気がかりであるなあ。誰に尋ねればよいのであろう。どのようにして生まれ、死んでいくのかも分からない我が身であるよ。

師伝によると、この形式では中心は松で、本木を二つ、株を二つである。あしらいは季節の花で、床の間の左側となる松の株のあたりにあしらがうのがよい。この花は真である。元服の祝儀は最も大切な行事であるから、満開の花は使わないのがよい。半開の花がよいと心得よ。

愚案によると、梅や桜を譲りの花という。また、第三皇子は羨みなさって、春<sup>はる</sup>は籬<sup>まがき</sup>のあたりに咲いた梅を摘んで頭に挿し飾りお身体に触れ、夏は橘の花を集めて香りを懐かしみ、秋は枯れていく藤袴や紅菊の匂いまでも集められるので、人々は句兵部卿と申し上げた。すべて香りの良い花材を活けるのを慣習とする。

【注】 1 「匂ふ宮といへるは、かほる大将の事にて候」（『龍野』）。清水婦久子氏によると、「平安末期書写の九条家旧

蔵『源氏古系図』には、匂宮巻を「薫中将巻」と記す。また、『源氏積』『奥入』『紫明抄』『河海抄』など平安く鎌倉期の古注では、「匂兵部卿」を表題とし「一名薫中将」と記す。それに対して「匂宮」という巻名は、漢文形式の『源氏物語願文』が初出で、三条西家系統の注釈書『弄花抄』『細流抄』『孟津抄』や、その影響を受けた版本によって普及した」という（『源氏物語の巻名の基盤』・森一郎・岩佐美代子・坂本共展編『源氏物語の展望』第一輯、三弥井書店、二〇〇七年三月）。一見、『源氏流極秘奥儀抄』と『龍野』の記述は巻の異名を指摘したように見える。しかし後続の文脈を勘案すると、両書とも匂宮と薫を同一人物と勘違いしたと解釈できる。2 「此巻、かほるとも、にほふ兵部卿共、云事は」〔『小鏡』〕。注1参照。『小鏡』の記述は巻名に関するもので、『小鏡』は匂宮と薫を混同してない。3 「三の宮と申て、むらさきの上やしなひたてまつりて、梅、さくら、ゆつり給ひしは」〔『小鏡』〕。紫の上は養育した「三の宮」〔匂宮〕に二条院を譲り、庭に咲く紅梅と桜を愛でて仏前に供えるようにと遺言した。40 御法の巻、注13参照。4 「是は、源氏の御子と申ながら、まことは、柏木の衛門と女三の宮との中の御子なりと申事ありまいらせ候」〔『龍野』〕。「かほる大将とは、かの女三の宮のわかみや。人めは源氏の御子、まことには、かしは木の大納言のこそかし」〔『小鏡』〕。『小鏡』に「かほる大将とは」とあるとおり、本来は薫についての記述。35 若菜下、注4参照。5 「十四才にて御元ふくあそはせし事より、書そめまいらせ候」〔『龍野』〕。一方『小鏡』は匂宮と薫の元服について、それぞれ記述している。「あかしの中宮の御はら、源氏の御まこの宮、けんふくし給ひては、兵部卿の宮と申」〔『小鏡』〕。「此君も、けんふくなども、けんし、れいせんゐんに申をき給ひしによりて、冷泉院にてせさせ給ふ」〔『小鏡』〕。『源氏物語』匂宮の巻では匂宮が元服した年齢を明記していないが（一八頁）、薫が元服した年齢は十四歳と記すので（二二頁）、『源氏流極秘奥儀抄』『龍野』の記述は薫の元服を指す。しかしながら、『源氏

物語」句宮の巻頭近くで語られるのは句宮の元服であるので、『源氏流極秘奥儀抄』と『龍野』の「書かきぞめ」は句宮の元服についての記述になる。この矛盾が生じたのは、両書が句宮と薫を同一人物と見なしたからである（注1参照）。ちなみに本居宣長『源氏物語玉の小櫛』三の巻「改め正したる年立の図」の「にはふみや」の欄には、「薫君十四歳と見ゆ」とあり、同巻「人々の年立」には、「句兵部卿宮は、（中略）句宮巻のはじめの年は十五也」とある（本文は『本居宣長全集』第四巻（筑摩書房、一九六九年一〇月）による）。6巻名歌。『龍野』は同文、『小鏡』は掲載せず。薫が自身の出生にまつわる秘密を薄々察し、我が身の来し方行く末を思い悩む気持ちを詠んでいる。注4参照。7「此かた、身木、松二本（種）二かふ也」（『龍野』）。「松」は「日本の伝統的な花材のなかでも、衆木にすぐれて第一等のもの」で、「松竹梅の三種の取り合わせは祝儀の花としてかんがえられ、そのなかでも若松は祝言第一の花材とされていた」（『いけばな総合大事典』）。「二本（種）」は本木が二つと考えられ、本木は「たて花の「しん」のことをいう」（『いけばな総合大事典』）。「二株（種）」は、「砂鉢や水盤など広口の花器に、あたかも稲の株をわけるように二つの株にわけることを株分けといい、その生け方を「二株生け」という」（『いけばな総合大事典』）。8「応答は時節の花、床の左りの方の松根斗にてすへし」（『龍野』）。「あしらひ」は「立華、生花では道具や役枝以外の枝のことをいう」。より正確には「あしらいの効果をだすためにもちいる枝」であり、「あしらいの枝をもちいるばあいは、あしらうべき相手をよく知り、あしらいの効果がでるような取り合わせと技が必要である」（『いけばな総合大事典』）。「時節（種）の花（種）」に何を用いるか『龍野』は明記していないが、『源氏流極秘奥儀抄』草の巻には春は梅・桜、夏は花橘、秋は藤袴・紅菊とある。9「此花、真なり」（『龍野』）。「真（種）」は「たて花、立華、生花の役枝名」（『いけばな総合大事典』）。あしらいの季節の花も、真を用いる。10「元服（祝儀）の祝義（種）の花、第一なれば、花（種）のさり（種）きらひ有之。能々、

可改也」(『龍野』)。「祝義」の花とは「お祝いごとの席にもちいるたて花、立華、生花などという。その季節の花材を中心にもちいることになっているが、季節の花材のよいものがないときやお祝いごとの内容によりその季節の花材が使用できないときには、常緑樹、なかでも松をもちいる」(『いけばな総合大事典』)。ここでは、松も季節の花も両方用いる。「盛の花」ではなく「半開」の花を良しとするのは、成人儀式である「元服」を飾る「祝義」には、これから枯れていく満開の花ではなく、これから盛りを迎える半開の花が相応しいというのであろう。11句宮が、紫の上から、二条院やそこに咲く紅梅・桜を譲られたことを受けて、「梅、桜」を「譲の花」というのであろう。注3参照。「梅」は注7参加。「桜」は「立華ではその美しさを十分にいかしてみせるために一色物としてあつかい、また生花においても一種生けとしてあつかっていた。他のものを取り合わせるばあいには、(中略)サクラの美しい花色をいかすために緑の葉物を添えていた」(『いけばな総合大事典』)。12「をのつから、かうはしくて、此世のかほりならず、あたり有かたければ、三の宮うらやみ給ひて、わさとこのみて」(『小鏡』)。「三の宮」(句宮)は薫の発する、この世のものとは思われない芳しい香りを羨んだ。13「春はまかきの梅をかさし、御身にふれ」(『小鏡』)。薫の芳香を羨む句宮は、春には梅の香りに執着した。14「夏は花たちはなをあつめ、香をなつかしみ」(『小鏡』)。ただし物語では、句宮が執着したのは梅・菊・藤袴・吾亦紅の香りで、橘の花は記されていない(二七頁)。15「秋はかれゆくふちはかまをにほはず。紅菊までも、にほひをあつめ給へは」(『小鏡』)。藤袴は「直立させてしん材としてつかい季節の花をあしらう」(『いけばな総合大事典』)。「源氏物語」には「老を忘るる菊」(二七頁)とあり、それが紅菊であるかは分からない。ちなみに王朝人は白菊を愛で、霜に当たり花びらの端が薄い赤紫色になるのも称賛した。16「をのつから御にほひ、かうはしくおはして、人々、にほふ兵部卿とそ申ける」(『小鏡』)。様々な花の香りに執着

し、薫香を衣服に移す努力を惜しまない三の宮は、匂兵部卿と呼ばれた。 17匂宮の香りへの執心を受けて、花材はすべて香りの良いものを用いる。

（高山草）

四十三 紅梅<sup>コウバイ</sup>

柏木大納言の御弟に、紅梅の大納言と聞へしは、世のおほへいみじく、何事も心ばへ有て、時の人もてなし奉り、大臣に成給へは、紅梅のおとゞともいへり。庭の紅梅美しく咲たるを折て、御歌をそへて、にほふ宮へつかはし給ひし也。是は一方の姫宮を、兵部卿に参らせたきとの心をこめての御事なり。されは紅梅の巻といへり。

心ありて風の匂はすその、梅に先、鶯のとはすや有へき

紅梅<sup>カウバイ</sup>

御伝曰、此形、幹、紅梅第一とする也。あしらひは大葉もの、びわ、おもと、しやがもよし。時節の珍花、留に生る。此大葉をば鶯のとはす羽とて習とす。此花、真に活へし。頃は二月と心得へし。

愚按ニ曰ク、へ心ありて風のはほす園の梅に先うぐひすのとはすや有べきと歌を以、本文習とす。歌の意「とはすや有べき」は、とふといふこと也。心 得たがひすべからず。又曰、紅梅に竹をいくることあり。竹川と同じ巻の論あり。

四十三 紅梅<sup>15</sup> 式部の宮。紅梅、枇杷、万年青、鳶尾、時節ノ珍花。

【訳】 柏木大納言の弟君で、紅梅の大納言と申し上げた方は、世間の評判がたいそう良く、何事にも心遣いがあり、時めく人が（紅梅の大納言を）厚く待遇申し上げ、大臣におなりになったので、紅梅の大臣ともいった。庭の紅梅が



美しく咲いているのを折って、お歌を添えて、匂宮にお送りになったのである。これはもう一人の姫宮（中の君）を、兵部卿（匂宮）のもとに嫁がせ申し上げたいとの気持ちをごめてのことである。それゆえ紅梅の巻といった。

考えがあつて、風が匂わす庭園の梅に、真先に鶯が訪れないことがあるでしょうか。（いや、きつと訪れます。）御伝によると、この形の中心は、紅梅を第一とするのである。あしらいは大葉もので、枇杷、万年青、シヤガもよい。時節の珍花は留めて活ける。この大葉を鶯のとわず羽（とわず葉）といつて、慣習とする。この花は真で活けるのがよい。時期は二月と心得なさい。

愚案によると、「考えがあつて、風が匂わす庭園の梅に、真先に鶯が訪れないことがあるでしょうか」という和歌をもつて、典拠とするのが慣習である。歌の意味で「訪れないことがあるでしょうか」は、訪れるということである。勘違いをしてはならない。また言うには、紅梅に竹を活けることがある。竹川と同じ巻の論がある。

【注】 1 「そのころ紅梅の大納言と聞えしは、かしは木のご大納言のおと、そかし。世のおほえいみしく、なに事も心はへありて、時の人もてなし奉り、大臣に成給へは、紅梅のおと、とも此人を云なるへし」（『小鏡』）。「衛門の御弟に、あわちの大納言といふあり」（『龍野』）。 2 「庭の紅梅、うつくしく咲たるを手折て、御歌をそへ、匂ふ宮へ御かはし給ひ候」（『龍野』）。「此御かたのにはに、なへてならず、おもしろきこうはいあり。（中略）ま、父大納言、この梅のえたのおもしろきをおりて、御このわかきみ、いまた、わらはてん上のほとなるを御つかひにて、にほふ兵部卿のもとへ、くれなるのうすやうに文かきて、たてまつり給ふ」（『小鏡』）。 3 「これは、ひとかたの姫宮を春部卿へまいらせたきとの心をこめての事にてありまいらせ候」（『龍野』）。長女の大君を春宮妃として入内させた紅梅の大納言は、次に次女の中の君を匂宮に嫁がせようと考えていた。 4 「扱、紅梅と云なり」（『小鏡』）。「是を、

紅梅の巻と申にて候」（『龍野』）。5 卷名歌。『小鏡』も『龍野』も同文。梅を中の君、鶯を匂宮に見立てて、中の君のもとに匂宮が訪れることを期待する歌である。なお梅の歌において「鶯との取り合わせは中国文学の影響」とされている（久保田淳、馬場あき子編『歌ことば歌枕大辞典』、角川書店、二〇一四年一月）。6 「此かた、身木、紅梅、第一とする也」（『龍野』）。梅は「正月から早春にかけての伝統的な花材。凛烈の寒気の中に香りをはなつて咲く気品のある花として、その詰屈とした枝振りの姿とともに愛され」、その中でも「紅梅は女性的な艶なる風情にとんでいる」（『いけばな総合大事典』）。7 「応答は大葉もの、びわの葉かしやかにて」（『龍野』）。『いけばな総合大事典』によると、「あしらい」は「一般的には、主となるものに添えて、その働きを助けるもの」で「立華、生花では道具や役枝以外の枝のことをいう」が、より正確に言う、「あしらいの効果をだすためにもちいる枝」である。大葉遣いは「一瓶をひきしめ強弱をあたえる立華の技法で」、「幹作りの立華ではかならず大葉を使用する」。枇杷は「伝統的な花材で」、「ことにビワの葉は立華の大葉遣いの材料としてもちいられる。万年青は40御法の巻、注6参照。シヤガについて、貝原益軒『大和本草』（一七〇九年刊行）の「紫羅傘<sup>いちは</sup>」の項によると、「又、鳶尾と云。（中略）射干は、倭名からすあふぎなり。鳶尾はいちはつなる事分明也。からすあふぎは茎高く花紅なり。いちはつは茎短く、葉ひろく、花紫に、燕子花に似たり。（中略）胡蝶花も此類なり」と記されている。当巻においてシヤガが大葉遣いで使用されることを鑑みると、「鳶尾」がふさわしいか。8 「時節の諸花、留メに生る」（『龍野』）。珍花は「開花の季節の初期に咲いた花のこと」で、「形や色のめずらしいものも」当てはまる（『いけばな総合大事典』）。「留<sup>とめ</sup>」は生け花を活ける際、花がながれないようにするための技法（『いけばな総合大事典』）。当巻のような「祝義<sup>祝儀</sup>」（『龍野』）の席では、花が「ながれる」（倒れる）ことがないように、「とくに祝儀祝言などのめでたい席や、客を招

待しての馳走の花には、心しなければならぬ」(『いけばな総合大事典』)ので、「留」が用いられる。9「此大葉をば、鶯のとはす葉とて、習とする也」(『龍野』)。「大葉」は39夕霧の巻、注7参照。巻名歌の一部「鶯のとはす」にちなみ、鶯を連想させる「とはす羽」を「とはす葉」に置き換え、大葉で表現する。10「真」は42匂宮の巻、注9参照。「時節の珍花」(注8)を「真」で活ける。11注5参照。12「とはすや有べき」は疑問表現ではなく、反語表現であると注意を促す。13巻名歌(注5)に梅と鶯を詠み合せているので、鶯に縁がある竹に紅梅を活けることで、和歌の内容を表わしている。和歌における竹と鶯の取り合わせについては、41幻の巻、注10参照。竹は「伝統的な花材で祝儀につかうものとして松や梅と組み合わせられ、竹の節目をいかして世をつく」という意味をもたせてつかわれていた」(『いけばな総合大事典』)。14竹川の巻と同じく、巻の順序に関する議論がある、という意味であろうか。『小鏡』では竹川の巻、『龍野』では紅梅の巻を先にする。「まことしき事もなく、五十四帖のほかに、すもりとて、おほつかなきところを、清少納言か、つくりいれたると、いふこともあり。その中に、こうはい、竹川ともいへり。又、竹川を、まついふ事もあり。おなし事なれば、論すへからすとなり」(『小鏡』)。15池田龜鑑『合本 源氏物語事典』(東京堂出版、二〇〇八年九月)の「式部卿」「式部卿宮」の項には三人が挙げられている。すなわち朝顔の君の父桃園式部卿、紫の上の父式部卿宮と、匂宮の兄にあたる二の宮である。紅梅の巻で生存していると考えられるのは二の宮であるが、初めて式部卿と呼ばれたのは52蜻蛉の巻である。ことによると「式部の宮」は匂宮を指す兵部卿宮の誤りかもしれない。

#### 四十四 竹川タケカハ

(菅野陽子)

竹川<sup>タケカハ</sup>といふは、歌<sup>ウタ</sup>によりて名<sup>ナ</sup>つけたり。玉<sup>タマ</sup>かづらの御腹<sup>オンハラ</sup>に、若<sup>ワカミヤ</sup>君<sup>ミヤ</sup>三人、姫君<sup>ヒメキミ</sup>二ところおはします。父<sup>チ</sup>ひげくろ関白<sup>クワンハク</sup>うせ給<sup>サカ</sup>ひて、盛<sup>サカ</sup>にうつくしくおはしけり。其<sup>コノ</sup>ころ、かをる大將<sup>ダイセイ</sup>いまた四位<sup>シ</sup>の侍從<sup>シヤウジ</sup>とておはせしころ、此<sup>コノ</sup>あね君<sup>キミ</sup>を心<sup>ココロ</sup>がけ、通<sup>カ</sup>ひ給<sup>サ</sup>ひし也。かをる君<sup>キミ</sup>も十五歳<sup>ジュウゴサイ</sup>なれば、此<sup>コノ</sup>若宮<sup>ワカミヤ</sup>を聳<sup>ムコ</sup>かねにと思<sup>オモ</sup>ひし事をかきたる卷<sup>マキ</sup>なり。

竹川<sup>タケカハ</sup>の橋<sup>ハシ</sup>打<sup>ウ</sup>いてし一<sup>ヒト</sup>ふしに深<sup>フカ</sup>き心<sup>ココロ</sup>のそこはしりきや

竹川<sup>タケカハ</sup>

御伝<sup>コトデン</sup>ニ曰<sup>イハク</sup>、此<sup>コノ</sup>形<sup>カタ</sup>、幹<sup>ミキ</sup>、葉<sup>ハフキ</sup>付<sup>ツケ</sup>竹<sup>タケ</sup>二本<sup>ニホン</sup>時節<sup>ジセツ</sup>の花<sup>ハナ</sup>あしらふへし。竹<sup>タケ</sup>の上<sup>ノウヘ</sup>、節<sup>フシ</sup>迄<sup>マデ</sup>二寸<sup>ニサン</sup>と一本<sup>ヒトポン</sup>は一寸<sup>イチサン</sup>五歩<sup>ゴフ</sup>とに切<sup>キル</sup>へし。頃<sup>コト</sup>は三月<sup>ヤヨヒ</sup>也。困<sup>クワシ</sup>碁<sup>ゴ</sup>の勝<sup>カチ</sup>まけ、花<sup>ハナ</sup>のかけ物<sup>モノ</sup>といふことあり。

愚<sup>クマシ</sup>按<sup>ニ</sup>曰<sup>イハク</sup>、竹川<sup>タケカハ</sup>に竹<sup>タケ</sup>を活<sup>イク</sup>ること尤<sup>モトモ</sup>也。しかるに竹川<sup>タケカハ</sup>とは、神樂<sup>カヅラ</sup>のうたひ物<sup>モノ</sup>也と心得<sup>ココロ</sup>てよし。竹川<sup>タケカハ</sup>といふ名所<sup>メイシヨ</sup>もあれとも、こゝにては神樂歌<sup>カクラウタ</sup>也。困<sup>クワシ</sup>碁<sup>ゴ</sup>のさた、空<sup>ウツ</sup>蟬<sup>セミ</sup>の卷<sup>マキ</sup>考<sup>カウ</sup>合<sup>カ</sup>せて活<sup>イク</sup>へし。又<sup>マタ</sup>、花<sup>ハナ</sup>のかけ物<sup>モノ</sup>とは、桜<sup>サクラ</sup>をかけ物<sup>モノ</sup>にて碁<sup>ゴ</sup>を打<sup>ウチ</sup>給<sup>サ</sup>ふによれり。桜<sup>サクラ</sup>もよし。

四十四 竹川<sup>タケカハ</sup>（恋）大<sup>オ</sup>ひめ。竹<sup>タケ</sup>、時節<sup>ジセツ</sup>、花<sup>ハナ</sup>、桜<sup>サクラ</sup>。

【訳】竹川<sup>タケカハ</sup>という（卷名）は、歌<sup>ウタ</sup>によつて名<sup>ナ</sup>付けられた。玉鬘<sup>タマカミ</sup>のお産<sup>ウマ</sup>みになつた子<sup>コ</sup>で、若君<sup>ワカキミ</sup>が三人、姫君<sup>ヒメキミ</sup>が二人いらつしやる。父<sup>チ</sup>の髭黒関白<sup>ヒゲクワシ</sup>がお亡<sup>ナシ</sup>くなりになつて、（玉鬘<sup>タマカミ</sup>の子供<sup>コ</sup>たちは）若<sup>ワカ</sup>い盛<sup>サカ</sup>りて美<sup>ミ</sup>しくていらつしやつた。その頃<sup>コト</sup>、薫大將<sup>カウダイセイ</sup>がまだ四位<sup>シ</sup>の侍從<sup>シヤウジ</sup>でいらつしやつた時<sup>トキ</sup>、この姉君<sup>イモメキミ</sup>を思慕<sup>オモヒ</sup>して、お通<sup>トウ</sup>いになつていたのである。薫君<sup>カウキミ</sup>も十五歳<sup>ジュウゴサイ</sup>であるので、（玉鬘<sup>タマカミ</sup>は）この若宮<sup>ワカミヤ</sup>（薫<sup>カウ</sup>）を婿<sup>ムコ</sup>にしたい、と思<sup>オモ</sup>つていたことを書いた卷<sup>マキ</sup>である。

「竹川<sup>タケカハ</sup>の橋<sup>ハシ</sup>」と歌<sup>ウタ</sup>いだした（催馬樂<sup>ヒメウタ</sup>の）「竹河<sup>タケカハ</sup>」の端<sup>ハタ</sup>の一<sup>ヒト</sup>節<sup>セツ</sup>に、私<sup>シ</sup>の深<sup>フカ</sup>い心<sup>ココロ</sup>の底<sup>ソコ</sup>はお分<sup>ワカ</sup>かりいただけたでしうか。

師伝によると、この形式は、中心が葉付きの竹二本で、季節の花をあしらうのがよい。(二本の竹のうち一本は)竹の(水面より)上、(二つめの)節まで一寸(約3cm)、もう一本は一寸五分(約四・五cm)のところで切るのがよい。時期は三月である。「囲碁の勝ち負け」、「花の懸け物」ということがある。

愚案によると、竹川(の巻)で竹を生けるのは道理にかなっている。けれども竹川とは、神楽の謡物(うたいもの)であると理解してよい。竹川という名所もあるが、この巻においては神楽歌である。囲碁の勝敗は、空蟬の巻を考え合わせて活けるのがよい。また「花の賭け物」とは、桜を賭け物にして(姫君たちが)碁を打ちなされたことに基づいていゝる。桜を活けるのもよい。

【注】 1 「此巻、たけかはと云事、(中略)歌の故なり」(『小鏡』)。「竹川の名は、歌のこと葉を名付たるにて候」(『龍野』)。 2 「玉かつらの御腹に、わか君三人、姫きみ二ところおはします」(『小鏡』)。「玉かつらの内侍には、御姫宮ふたり、若宮三たり、おわしました候」(『龍野』)。 3 「此ひけくろの大將をは、後(のちのち)におと、とて、関白(くわんぱく)もち給ひしそかし」(『小鏡』)。「父(ちち)うせ給ひて、さかりにいつくしくおはしけり」(『小鏡』)。三条西実隆が著した注釈書『細流抄』にも「関白になり給也」とあるが、物語では太政大臣までで「関白」とは呼ばれていない。 4 「其ころ、かほる大將(しやう)、いまた四位の侍従(じしゆ)とておはせしころ、此あね君(きみ)を心かけ、かよひ給ひしなり」(『小鏡』)。 5 「かほる大將も、御年十五才なれば、此君を婿かねにとおもひ給ひし事を、書たりし巻にておはしました候」(『龍野』)。「六条院の御末に、朱雀院の宮の御腹に生まれたまへりし君、冷泉院に御子のやうに思しかしづく四位侍従、そのころ十四五ばかりにて、いとよきはに幼かるべきほどよりは、心おきておとなおとなしく、めやすく、人にまさりたる生ひ先しるくものしたまふを、尚侍(かむ)の君は、婿にても見まほしく思したり」(六三頁)。 6 卷名歌。『小鏡』も『龍野』も

同文。この和歌は、玉鬘邸で開かれた小宴に参加した薫が、そこで歌われた催馬楽「竹河の橋の詰なるや 橋の詰なるや 花園にはれ 花園に 我をば放てや 我をば放てや 少女たくへて」を踏まえ、大君(玉鬘の娘)を思う気持ちを込めて詠んだ。7 「此かた、身木、葉付竹、二本に、時節の花、応答すへし」(『龍野』)。8 「竹の上よりふし迄、一寸と、又一本は一寸五分とに、小口切るへし」(『龍野』)。竹は「水ぎわ一寸のうちに必ず節をみせる」などの伝があり、立華や生花では水際から立ち上がる竹の一節めの位置についての寸法をさだめている(『いけばな総合大事典』)。9 「碁のかちまけあねきみまけ給ふ。はなのかけ物」(『小鏡』寄合語)。「この姫君たち、さくらをかけ物にて、碁をうたせ給ひしを見て」(『小鏡』)。「中将など立ちたまひて後、君たちは打ちさしたまへる碁打ちたまふ。昔より争ひたまふ桜を賭け物にて、「三番に数一つ勝ちたまはむ方に花を寄せてん」と戯れかはしきこえたまふ」(七九頁)。10 注78参照。11 「竹河」という催馬楽をさす。12 「竹川」は、「伊勢国の歌枕。現在の三重県明和町で、斎宮のあった場所をさす。祓川(多気川)にもとづく地名。「竹」および伊勢神宮との関係から常緑で長い時間変わらぬもの、というイメージをもつ。(中略)催馬楽の「竹河」は、それ自体貴族の間でよく謡われたが、正月の年中行事である男踏歌おとこたかの中でも謡われ、平安貴族の耳に親しいものだった。『源氏物語』竹河の巻は、作中人物が催馬楽を謡い、男踏歌が描かれていることにちなむ巻名である」(久保田淳・馬場あき子編『歌ことば歌枕大辞典』角川書店、一九九九年五月)。『日本国語大辞典』によると、男踏歌は「正月一五日、殿上人、地下人などで四位以下の人達が、禁中から諸院、諸宮、貴族の邸へ、催馬楽を歌いながら巡回する行事」。13 『源氏物語』には「右勝たせたまひぬ」(八〇頁)とあり、囲碁の勝負で中の君が勝利した。注9参照。14 空蟬と軒端萩が碁を打っているのを、光源氏が垣間見たことを指す(3空蟬の巻、注3)。『源氏物語』空蟬の巻では、「昼より西の御方の渡らせたまひ

て、碁打たせたまふ」と言ふ。さて向かひみたらむを見ばやと思ひて、やをら歩み出でて簾のはさまに入りたまひぬ。この入りつる格子はまだ鎖さねば、隙見ゆるに寄りて西さまに見通したまへば、この際に立てたる屏風端の方おし畳まれたるに、紛るべき几帳なども、暑ければにや、うちかけて、いとよく見入れらる」（一一九頁）とある。

15 注9 参照。 16 「サクラをいけた生花は他のものにくらべて格のあるものとして上座に置かれるなど、花物の花材としては別格のものとしてあつかわれていた」（『いけばな総合大事典』）。

（小林芙美）

四十五 橋姫 是ヨリ以下ヲ宇治十帖といふ

宇治の橋姫、本説あり。うばそくの巻ともいふ。八の宮とて、源氏の御伯父君、都の住るもむつかしくおぼして、宇治の宮に住給ふ。何事の道にも、くらからすおはしければ、かをる大將も物字びに通ひ給ひし也。いとつつくしきひめ君、二人持たてまつり給へり。「有明の月をまねく」といひて、よろづのやさしくおもしろきことすることあり。さて姫宮に心をよせ給へる歌、

橋姫のこゝろを汲て高瀬さす棹の雫に袖そぬれぬる

橋姫 宇治十帖

御伝ニ曰、此形、條ものを活る。大葉ものを幹として生る也。ズハエ、花有時は、其木の花を下にあしらふへし。花なき時は外の花をあしらふ。大葉物が熊笹かを活へし。おもと、ばらん、柏、しをん、しやがの内、スハエ梅桃、数多し。又、槓にても仕立る也。

愚按ニ曰、白花を高く活る事、習あり。白椿、白牡丹をよしとす。此巻に「有明の月をまねく」といひて、よろ

すのやさしくおもしろき事コトすることあり。又、<sup>16</sup>「黄鐘調にしらへて、笙シヤウの琴コトいとねたくおもしろくて、川カハなみのひ、き、松マツの風カゼ、おりにあひたる心ちして、馬ウマひきとめて聞給へは」と有。馬蘭バラン、河波カハミにたとふ。松マツもよし。太蘭フトキもよし。笙シヤウにたとふ。駒ウマつなぎと云草あり。それを活イッる事、習ナライあり。

四十五 橋姫 柏木の右兵衛門。條ズバもの、大葉もの（熊笹）、万年青、巴蘭、紫苑、鳶尾、白椿、白牡丹。

【訳】 宇治の橋姫には、典拠がある。（橋姫の巻は）優婆塞の巻とも言う。八の宮といって、源氏の（異母弟であり、薫の）御叔父君（である人が）、都の住まいも、わずらわしくお思ひになつて、宇治の宮にお住まいになる。（八の宮は）どの分野にも通じていらつしやつたので、薫大将も字びに通われたのである。（八の宮は）たいへん美しい姫君を、二人お持ちであつた。（秋の夜に二人の姫君が）「有明の月を招く」と言つて、様々な優美で趣深いことをするこゝとがある。そこで、（薫が）姫君に心をお寄せになつた歌、

宇治の橋姫の心を汲みとつて、川の浅瀬をゆく（舟人が）棹の雫に袖が濡れてしまつた（ように、大君の心を汲みとつた私の袖も涙で濡れてしまつた）なあ。

師伝によると、この形は、ずわえものを活ける。大葉ものを幹として、活けるのである。ずわえに花がある時は、その木の花を、下にあしらうのがよい。（ずわえに）花がない時は、ほかの花を飾りつける。大葉物が熊笹かを活けるのがよい。万年青、葉蘭、柏、紫苑、射干の中（から選んで活け）、ずわえは梅や桃など数多くある。また、楨においても整える。

愚案によると、白い花を高く活けることが、慣習にある。月にたとえるのである。白椿、白牡丹がよい。有明の月にたとえる。この巻に、（姫君が）「有明の月を招く」といつて、様々な優美で趣深いことをすることがある。ま



た、「琵琶の音色を」黄鐘調に調えて、笙の琴（の音色も）、たいへんすぐれて趣深い様子で、川波の響きや松の風が、折に相応しい思いがして、（薫が）馬を引き留めてお聞きになる」とある。葉蘭を、川の波にたとえる。松もよい。太藪もよい。（これらは）笙にたとえる。駒つなぎという草がある。それを活かせることが、慣習にある。

【注】1 「是より中の段を、宇治十帖と申まいらせ候。」（『龍野』）。「宇治十帖」（『小鏡』）。「宇治十帖」とは『源氏物語』五十四帖のうちの最後の十帖の通称。2 「橋姫はしひめうはそくの巻まゐいふ」。「是も宇治うちのはし姫の本説有。又うはそくと云事」（『小鏡』）。「一優婆塞。廿八。一名橋姫」（『源氏物語奥入』）。橋姫は「橋を守る女神」とされ、特に宇治の橋姫は、「京都府宇治市、宇治橋のほとりにある橋姫神社の祭神に付会されている伝説上の女性。古来、和歌の世界で、橋姫伝説の流布に従い、巫女（みこ）、遊女、愛人と広い意味をこめて歌われている」（『日本国語大辞典』）。ここでいう「本説」は、この橋姫伝承をさすか。「さむしろに衣かた敷き今宵もや我を待つらむ宇治の橋姫」（古今和歌集・卷十四・恋歌四・六八九・よみ人しらず）。「優婆塞」とは「在家のままて、仏道修行にはげんでいる人。（中略）『源氏物語』の橋姫の巻は「優婆塞」と呼ばれ、作中の宇治八宮が「俗聖（ぞくひじり）」として、（中略）山に籠つて修行する僧と対比されている」（『日本国語大辞典』）。3 「宇治の里に八の宮とて、光る源氏の御おぢ君、おはしまし候」（『龍野』）。「宇治に、ふるき宮すみ給ふ。此宮は桐壺の御門の八の宮、けんしには御おと、そかし」（『小鏡』）。「源氏の大殿の御弟、八の宮とぞ聞こえしを」（一二五頁）。八の宮は光源氏の異母弟にあたるため、系譜上では、八の宮は薫の叔父にあたる。4 「都みやこのすまねもむつかしくおほして、宇治うちに山里やまさともち給へりける所にうつりすませ給ふ」（『小鏡』）。「かかるほどに、住みたまふ宮焼けにけり。いとどしき世に、あさましうあへなくて、移ろひ住みたまふべき所の、よろしきもなかりければ、宇治うちといふ所によしある山里持たまへりけるに渡りたまふ」（一二五頁）。

皇位継承を巡って、弘徽殿女御の画策に巻き込まれた八の宮は、京での立場が悪くなったことが、橋姫の巻で語られる。5 「此宮、何事の道にも、くらからさりければ、かほる大将、ものならひに御かよひなされ候」(『龍野』)。「大かた此宮は、諸道のたつしやにておはしける程に、かほる大将、とくみ参りて、物などならひたて奉り、なつかしくおもひたてまつりて、かよひし程に」(『小鏡』)。物語本文には、「才など深くもえ習ひたまはず、まいて世の中に住みつく御心おきてはいかでかは知りたまはむ(中略)はかなき遊びに心を入れて生ひ出でたまへれば、その方はいとをかしうすぐれたまへり」(一二四頁)、「八の宮の、いとかしこく、内教の御才悟深くものしたまひけるかな」(一二八頁)とあり、ここでいう「道」とは、漢学などの学問ではなく、仏教や音楽に関するものであると考えられる。6 「姫宮一人おはしまし候に」(『龍野』)。「いとうつくしきひめ君二人、もちたてまつり給へり」(『小鏡』)。八の宮には、大君と中君の二人の娘がいる。『龍野』の記述は、このうち薫が歌を贈った大君をさすものと考えられる。7 「此巻に、「有明の月をまねく」といひて、よろつのやさしく、おもしろき事することあり」(『小鏡』)。「ありあけ、まねく」(『小鏡』寄合語)。物語本文には、二人の姫君が舞曲や故事を踏まえて、「月を招く」とたわむれる描写がある。「有明の月のまだ夜深くさし出づるほどに出で立ちて」(一三五頁)、「一人は柱にすこし隠れて、琵琶を前に置きて、撥を手まさぐりにしつつまたるに、雲隠れたりつる月のはかにいと明くさし出でたれば、扇ならで、これしても月はまねきつべかりけり」とて、さしのぞきたる顔、いみじくうたげにほひやかなるべし。添ひ臥したる人は、琴の上にかたぶきかかりて、「入る日をかへす撥こそありけれ、さまざまにも思ひおよびたまふ御心かな」とて、うち笑ひたるけはひ、いますこし重りかによしづきたり」(一三九頁)。8 卷名歌。『小鏡』は異同なし。『龍野』は結句が「神ぞぬれぬる」。宇治の橋姫に、姫君の心情を重ねた歌。「橋姫」は大君をたとえる(『源氏物語

大辞典「橋姫」項。橋姫については注2参照。 9 「此かた、すわいものを生、大葉ものを身木として生る也」(『龍野』)。「すわい」は「ズハエ」とも言い、「木の枝や幹から、まつすぐに細く長く伸びた若い小枝」(『日本国語大辞典』)。また、特に「梅の若枝のこと」(『いけばな総合大事典』)。元禄期の正統派立華伝書である『立華極秘口伝抄』には、「梅のしわいの真<sup>上</sup>長<sup>く</sup>指者也(中略)上へ長く式本<sup>ニテ</sup>も三本<sup>ニテ</sup>も高くつかふ」と見える。大葉とは「立華の道具の一つで、正真の下から胴作にかけてもちいらられる大きな葉のこと。(中略)花材は枇杷の葉が一般的だが、柏、朴<sup>ほ</sup>などの葉もちいられる。草物の立華では、紫苑・葱花<sup>きんぽうし</sup>などがもちいられる。(中略)はらはは広葉であるが、立華につかわないのが習いである」(『いけばな総合大事典』)。また「葉もの」については、33藤裏葉の巻の注20参照。 10 「すわい花ある時ならば、其木の花を下に応答へし。花なき時は、外の花をあいしらふ」(『龍野』)。

11 「大葉か熊笹」(『龍野』)。熊笹は「チマキササ、ネマガリダケなど、山地にはえる笹の俗称」、隈笹は「イネ科クマザサ属の常緑の竹。(中略)冬、縁が白色に変わる。(中略)葉の縁の白い隈取りからこの名がある」(『日本国語大辞典』)。「生花の松竹梅に取り合わせるることもある。白梅に隈笹の取り合わせは品がよい。盛花や投入花には、枯れた葉を生かして現代的に扱ったり、松などと取り合わせていける」(『いけばな花材総事典』)とあるので、『龍野』の「熊笹」は隈笹かもしれない。 12 「おもと、はれん、柏、しおん、しやかの内、すわへ、梅桃の類也」(『龍野』)。

万年青、馬蘭、柏、紫苑、射干はすべて大葉物を指す。万年青は40御法の巻、注6参照。馬蘭(はれん)は「ねじあやめの漢名」。ちなみに葉蘭(はらん)は「ユリ科の常緑多年草」で古名は馬蘭(ばらん) (『日本国語大辞典』)。柏は柏木を表す(31真木柱の巻の注15)。紫苑について30藤袴の巻の注10には、「愚按<sup>ニ</sup>曰、蘭<sup>ヲ</sup>をフヂハカマと云。群芳<sup>クワフ</sup>譜<sup>ニ</sup>曰、蘭<sup>ヲ</sup>はアラ、ギ也。紫苑<sup>シオシクハ</sup>花をフヂハカマと云也。」とあるが、『日本国語大辞典』では「秋に、径約三センチメ

トルの淡紫色の頭花を多数つける。（中略）おもいぐさの紫苑と、秋の七草の一つである藤袴とは別に扱う。射干は檜扇の漢名（31真木柱の巻の注12）で、注7に引用した物語本文中の「扇」を念頭においたものか。桃については「大きな枝を花材とすることはあまりなく、主として若枝のすなおな枝振りがこのまれている。（中略）ウメとはまったくちがって屈曲した枝をさけてまっすぐな若枝をつかうことが、立華をはじめ生花一般の習いであった」（『いけばな総合大事典』）とあり、梅に加えて桃のまっすぐに伸びた若枝も、ここでは「すはえ」と呼んでいる。13「又、枯にても仕立る也」（『龍野』）。槇は松に似た樹木で、枯れ葉を用いる手法もあったので、「槇」と「枯」のいずれが誤写か判断しがたい。14白い花は月に例えられる。18松風の巻の注17参照。15注7参照。16黄鐘調とは「雅楽六調子の一つ。黄鐘の音（イ音）を主音、すなわち宮音とする旋法。おうしき」（『日本国語大辞典』）。『源氏流極秘奥儀抄』の本文では黄鐘調に整えたのは「笙の琴」になるが、その引用元である『小鏡』も物語本文も琵琶である。「黄鐘調にしらへて、ひきすさひたるばちをと、たえくく<sup>（音）</sup>に聞ゆ。しやうのこと、いとねたく、おもしろくて、川なみのひ、き、松の風、おりにあひたる心ちして、馬ひきとめて聞給へは、此宮に姫君たちのあそひ給ふなるへし」（『小鏡』）。「琵琶の声の響きなりけり。黄鐘鐘に調べて、世の常の掻き合はせなれど、所からにや耳馴れぬ心地して、掻きかへす撥の音も、ものきよげにおもしろし。箏の琴、あはれになまめいたる声して、絶え絶え聞こゆ」（二二七頁）。「川なみのひ、き、松の風」は『小鏡』の引用で、物語本文では「いと荒ましき水の音、波の響きに、もの忘れうちし、夜など心とけて夢をだに見るべきほどもなげに、すくく吹きはらひたり」（一三二頁）という、薫が宇治を初めて訪れた際の描写である。なお桐壺の巻の注16にあるように、松の風は琴の音色に例えられ、桐壺以後の巻でも度々用いられている。17葉蘭には葉に模様のあるものがあり、ここでは河波にたとえる。ちなみに7紅

葉賀の巻の注18では、葉蘭を青海波にたとえる。

18 注16の「松の風」を松で表現し、太蘭を筥の形状にたとえる。

なお太蘭については11花散里の巻の注14参照。

19 マメ科の野草。また、狼牙みつもと（三本草「バラ科の多年草。各地の山

野に生える」『日本国語大事典』）の古称。「狼牙和名古未豆奈木」（『倭名類聚抄』）。注16の「馬ひきとめて」を表現する。

（浦野洋紀）

#### 四十六 椎本

シイカモト

1 うばそくかくれ給はん程ホトチカ近くなりて、<sup>2</sup> かをるれいの宇治ウヂに参給ふに、宮ミヤいつよりも物モノあはれなる御心ミココロちして、れいの  
四季シキの御念コネン仏フツに山ヤマへ入給イリタマはんにや、秋アキのけしき、<sup>3</sup> ととは山ヤマもいろつきて猶尋ナラツツネ来キにけりなと、なかめておはしたる  
に、宮ミヤはまちよろこひ給ひて、なからむあとの事コト、姫君ヒメキミなどの事コトまで数々カス申ウケをきて、むなしく成給ナリタマひし巻也マキガシ。

6 立タよらんかげと頼タノみし椎シキか本モトむなしき床トコになりナリける哉

椎シキか本モト

御伝コトツタニ曰イハカ、此形コノカタ、幹ミキは生木イクキならは生木イクキ、生草ウサなれば草クサとして、それにかれ物モノか干物ヒモノか添ソベて活イキる也。其下シタに草花サウカハをあし  
らふへし。無常ムジョウの花ハナと心得ココロウへし。頃トキは秋也。

愚按クアンニ曰イハク、四季シキの御念コネン仏フツに山ヤマへ入給イリタマはんにやなと有。草花クサハナを六種ムシナイク活イキる事、六字ロクジ、名号メイガウにたとふ。又、翁草オキナクサ、白頭翁ハクドウウフ  
といふ草クサもよし。「老オシとけはかならずおなししいほりに」なと、契チキり給タマひし事コトあり。此巻コノマキ、二月ニフツキはつか頃トキよりの事也。  
又、梅ウメを活イキるもならひ有。初瀬ハツセ参マりもあまたあり。此巻コノマキより始ハジマる。さて、初瀬ハツセに梅ウメは縁ユカリある花也。是コトシ、椎シキか本モト巻中マキナカ  
の意味イミ深長シムナヤなることしるへし。

四十六 椎本（吊） 女三メヨのみや。生木イクキ、生草ウサ二、枯物カモノカ干物ヒモノヲ添ソベエル。翁草（菊）、梅。

【訳】優婆塞の宮（八の宮）の亡くなられる時が近くなって、薫がいつものように宇治に参上なさると、八の宮はふだんよりしみじみとしたお気持ちになって、いつものように四季のご念仏の修行を勤めに山寺へ入りなさろうと思っただからであろうか、秋の様子、音羽山も（紅葉し）色づいているのを、やはり（この宇治まで人は来ないが秋は）訪ねて来たのだなあと、ほんやりと見ておられるとき、八の宮は（薫の来訪を）待ち喜びなさって、亡くなった後のことや姫君などのことまで多くのことを申しておかれて、お亡くなりになった巻である。

身を寄せる陰として頼りにしていた椎の木の根もとのような（存在であった）八の宮が亡くなり、（宮の）部屋は虚しい床になってしまったなあ。

師伝によると、この形式では中心は生木ならば生木、生草ならば生草として、それに枯れた物か干からびた物かを添えて活けるのである。その下に草花をあしらうのがよい。無常の花と心得よ。時節は秋である。

愚案によると、「四季のご念仏の行を勤めに山へ入りなさろうと思ったのであろうか」などと（書いて）ある。草花を六種類活けることは、六字の名号に喩える。また、翁草草である、白頭翁という草もよい。（薫は八の宮に）「老いて（出家を）成し遂げたならば必ず同じ庵で（仏道修行に励もう）」などと、約束なさったことが（書いて）ある。この巻（の内容）は、二月二十日頃からのことである。また、梅を活けるのも慣習である。初瀬詣も多く（書いて）ある。（宇治十帖において、初瀬詣の描写は）この巻から始まる。ところで、初瀬に梅は縁のある花である。このことが、椎本の巻における意味深長な点であることを理解せよ。

【注】 1 「此うはそく、かくれ給はん程ちか近くなりて」（『小鏡』）。「うばそく」（優婆塞）は、桐壺帝第八皇子である八の宮を指す。45橋姫の巻、注2参照。 2 「かほる、れいの宇治ちへまうて給ふに」（『小鏡』）。 3 「宮いつよりも物

あはれなる御心ちして、れいの四きの御念仏に山へ入給はんとにや」(『小鏡』)。「ものしつかなる山寺にこもり念仏して」(『龍野』)。物語には「四季の御念仏」という言葉は見当らないが、45橋姫の巻に「(八の宮は) 秋の末つ方、四季にあててしたまふ御念仏を、この川面は綱代の波もこのごろはいとど耳かしがましく静かならぬをとて、かの阿闍梨の住む寺の堂に移ろひたまひて、七日のほど行ひたまふ」(一三五頁)とあり、頭注に「四季ごとに七日ずつ行う念仏会。僧に阿弥陀経を読ませ念仏をさせる」とあるものを指すと考えられる。4「かほるも都へは、いまた入たらぬ秋のけしき、をとほの山も色付て、猶たつねきにけりなと、なかめておはしたるに」(『小鏡』)。物語には「都にはまだ入りたぬ秋のけしきを、音羽の山近く、風の音もいと冷やかに、榎の山辺もわづかに色づきて、なほ、たづね来たるに、をかしうめづらしうおぼゆる」(二七九頁)とあり、七月に宇治を訪れた薫が秋の気配を感じている。一方『源氏流極秘奥儀抄』では「宮いつよりも」の続きで、宮が感じたことになる。5「宮はまちよろこひ給ひて、なからむあとの事、姫君などの事、数々申をき給ひて、そのま、対面もなく、むなしく成給ひし事、あかすかなしき」(『小鏡』)。「しるか元の巻は、宇治の宮、かほる大將に、なからんあとをたのみおきたまひ(中略)むなしくなりたまひたる事、書たるにておはしまし候」(『龍野』)。6巻名歌。『小鏡』は同文。『龍野』は初句が「立ちよらぬ」。薫が頼りにしていた八の宮に先立たれたこと、そして生前の八の宮が勤行した部屋が既にほとんど面影を残していないことを受け、八の宮を偲ぶ気持ちで詠んだ薫の和歌。7「此かた、身木は生木ならば生木、生草なれば生草にして、それへ、かれ物か干物かを添て生るなり」(『龍野』)。「生木」「生草」は薫、「かれ物」「干物」は亡き八の宮の比喩か。ちなみに枯れ葉は、「祝言性の強い席には使用しないし、一般的にもこのんで使用するものではないが、蓮の立華のように過去・現在・未来(前世・現世・来世)の三世を一瓶の中に表現するものは朽ち葉と称して使

用する」(『いけばな総合大事典』)。41幻の巻、注1415参照。 8 「其下に、草花を応答スベシ」(『龍野』)。「草花」は大君・中君に見立てたか。「あしら」いについては42匂宮の巻、注8参照。 9 「無常花なり」(『龍野』)。「無常の花」すなわち咲いて散る花材を用い、松など常緑の花材を避けるのは八の宮の死去を表すから。 10 「宮かくれ給ふ事は、秋なり」(『小鏡』)。八の宮の死去は「八月二十日のほど」(二八八頁)で、旧暦七く九月は秋。 11注3参照。 12 「六字名号」とは「南無阿彌陀仏」の六字を指す(『日本国語大辞典』)。六種類の草花を活け、一種ずつ一字に喩える。これも仏道に励んだ八の宮の死に関わる。 13 「翁草」は、「四、五月ごろ、葉の中心から高さ一〇く四〇センチメートルになる花茎を伸ばし、先端に内面が暗赤色、外面に絹毛を密生した六弁の花を開く。花後、雌しべは長く尾状に伸び、密に生えた羽毛とともに老人の銀髪を思わせる」(『日本国語大辞典』)。「白頭翁」は「翁草」の漢名(白頭公ともいう)。六弁の花は「六字名号」に、また「老人の銀髪を思わせる」「雌しべ」は老いた八の宮(六十歳前後)の面影に重なる。「翁草」については注22も参照。 14 「我も老とけは、かならずおなしいほりに」など、ちさり給ひし事もひ出て」(『小鏡』)。注6参照。 15 「此巻の二月廿日ころなるへし」(『小鏡』)。「源氏物語」椎本の巻頭は「二月の二十日のほどに、兵部卿の宮初瀬に詣でたまふ」(二六九頁)。 16 「梅」は「正月から早春にかけての伝統的な花材」(『いけばな総合大事典』)で、当巻が二月より始まることを受ける。 17 「宇治の中やとり」とは、十帖の中にあまた所あるか、是よりはしまりて、中やとはみゆ。「はつせ参り」も、あまたあり。此巻よりはしまる」(『小鏡』)。「初瀬参り」(初瀬詣)は、「大和国(奈良県)初瀬の長谷観音に参詣すること」(『日本国語大辞典』)。長谷寺の本尊・十一面観音像はその靈験あらたかさから信仰を集め、平安時代には貴族による初瀬詣が隆盛した。宇治十帖では数多くの初瀬詣が描写されるが、その皮切りが当巻である。 18初瀬と梅を取り合わせた例として



は、紀貫之の和歌「人はいさ心もしらずふるさは花ぞ昔のかにほひける」（『古今和歌集』巻一・春歌上・四二）の詞書に、「初瀬にまうづることに宿りける人の家に久しく宿らで、ほどへてのちに至れりければ、かの家のあるじ「かくさだかになむ宿りはある」と言ひいだして侍りければ、そこに立てりける梅の花を折りてよめる」とある。

19 注17の内容を受け、宇治十帖の物語展開において当巻の重要な役割を示す。 20 「吊」は41幻の巻、注12参照。

21 「権本 女三のみや」（『龍野』）。当巻に登場する女三の宮は薫の母。 22 「翁草」は菊の異名でもある（『日本国語大辞典』）。菊は「秋を代表する伝統的な花材として古典の立華から現代にいたるまで使用度のもつとも高いものであった」（『いけばな総合大事典』）ので、八の宮が亡くなった秋にふさわしい。

（高山卓）

